

学会ニュース

目次

・ 第 39 回大会について 1
・ 京大人文研「中川文庫」開設のお知らせ（王寺賢太） 2
・ ミニ・シンポジウム「デジタル資料の展開と古典研究の可能性に向けて」その後（福田名津子） 4
・ 事務局より 5

第 39 回大会について

来年度の第 39 回大会は 2017 年 6 月 24 日（土）、25 日（日）の両日、立教大学で開かれる予定です。開催校責任者は坂本貴志会員です。

本大会では共通論題及びミニセッションが開催される予定です。1 日目の共通論題は「コスモポリタニズムの歴史的文脈」で、コーディネーターは大石和欣幹事です。また 2 日目の共通論題は「複数世界論の 18 世紀」で、コーディネーターは坂本貴史幹事です。

自由論題公募要領

第 39 回大会で発表を希望される会員は、1000 字以内の発表要旨をつけて、**2017 年 3 月 3 日（金）**までに学会事務局宛、郵便かメールでお申し込みください。郵送の場合は要旨のプリントアウト原稿および電子ファイル（「ワード」形式で作成されたもの）の両方をお送りください。メールの場合は、要旨を添付ファイル（「ワード」形式）またはメール本文にコピーしてお送りください。報告の採用の可否は幹事会で審査し、事務局から後日お知らせいたします。

発表は 1 件につき 50 分、うち報告が 40 分、質疑応答が 10 分の予定ですが、申込者が多数の場合は、個々の発表の時間を短縮したり、あるいはこれまでの発表の有無、共通論題を含む諸分野のバランスなどを勘案して、幹事会で調整させていただくこともありますので、この点はあらかじめご了承くださいませよう、お願い申し上げます。また会場で配布されるコピー資料は、原則としてご自分でご用意いただくことになっています。

詳細はプログラムが決定され次第、事務局から個々に連絡申し上げます。

京大人文研「中川文庫」開設のお知らせ

王寺賢太（京都大学・国際幹事）

2016年11月12日、京都大学人文科学研究所では、日本18世紀学会との共催により、「国際ワークショップ 東アジアで18世紀研究者であること」が開催された。中川久定先生が2015年に刊行した浩瀚な論文集 *L'Esprit des Lumières en France au Japon* (『フランスと日本における啓蒙の精神』パリ、シャンプイオン社刊) を題材に、韓国18世紀学会副会長の李永睦さん、当学会の増田真さん、逸見龍生さん、京大人文研の森本淳生さんと私がパネラーとして、東アジアにおける18世紀西ヨーロッパ研究の来し方行く末を考えるという企画である。残念なことに、この合評会の開催を望んでおられた中川先生御自身は体調不良のため出席が適わなかったが、当日は一般からも50名ほどの聴衆を得て活発な議論を行うことができた。登壇者各氏のコメントはフランス語で、2018年3月刊の京大人文研の欧文紀要 *ZINBUN* (第48号) に発表される予定なので、御関心の向きは是非御覧頂きたい。

この催しは、中川先生から個人蔵書の寄贈を受けて(2015年秋)、京大人文研に「中川文庫」が開設されたことを記念して行われた。当学会創立メンバーで、国際学会副会長まで務めた中川先生が、国内でも有数の18世紀フランス文化研究関連の古書収集家でもあったことはよく知られている。もっとも、その蔵書が人文研に収められたことをいぶかしく思われる向きもあるかもしれない。人文研が第二次世界大戦後の日本における18世紀フランス思想史研究を主導したのは事実であるにせよ、そのかつての人文研の研究業績に対して、中川先生は折に触れて批判を口にされてきたからだ。フランス政府給費留学生としてのパリ留学時(1959~61年)、ソルボンヌで若き日のジャック・プルーストが *ZINBUN* 第1号(1957年)掲載の桑原武夫・鶴見俊輔・樋口謹一共著論文「*Sur les collaborateurs de l'Encyclopédie* 百科全書の協力者について」を手厳しく批判した場に居合わせた中川先生が、その後、フランスの研究者に劣らぬ文献学的知識と学問的厳密さで研究を遂行するのを目指すことになったという逸話は、余りにもよく知られている。

とはいえそうした批判は、中川先生にとっては自身の18世紀フランス研究の出発点でもあった人文研に対する愛着の裏返しでもあっただろう。中川先生が京大に学生として在籍し(1949~59年)、伊吹武彦と桑原武夫を指導教官としてディドロ研究を始めた時期は、ちょうどその桑原が矢継ぎ早に18世紀フランスについての共同研究班を組織していた時期(1948~59年)に当たる。そればかりか、中川先生がフランス語で刊行した回想録には、プルーストに批判された当の論文の仏語訳を桑原から任された学生の一人が中川先生自身であったこと、そして留学以前、博士課程の学生としては例外的に『百科全書』共同研究班に参加を許されて以来、帰国後も60年代を通じて中川先生が人文研に足繁く通ったことが明かされている。実際、2013年秋、蔵書寄贈の御提案を受けて私が直接お話をうかがったときも、中川先生は自分が人文研で過ごした時代と、そこで出会った学者たちへの愛着をしきりと語っておられた。私とその有り難い御提案を受けて、早速中川先生の蔵書整理に取りかかったことは言うまでもない。その後、柴田秀樹氏(京大文学研究科博士課程)の尽力を得てなった寄贈図書の一覧とともに、「中川文庫」が正式に人文研に受領されたのが2015年秋のことになる。

総計 5300 点に及ぶ「中川文庫」の主要部分は、日本国内では稀な 18 世紀フランスの原典と研究書を中心とするコレクションである。洋書約 4400 点、和書約 900 点の内訳をこの文庫の整理にあたって特別に立てた分類に従って示せば、まず洋書として、① 18 世紀刊行フランス語書籍中心の「貴重書」約 1200 点、② 西洋古代・近世「原典」現代版・復刻版約 860 点、③「西洋近世」関連研究書約 1460 点、④「西洋近現代」原典・研究書約 800 点（含・近代日本文化関連の訳書・研究書）が挙げられる。このうち西洋近世・近現代研究書は、さらに「歴史・政治」「宗教」「哲学・思想」「文学・芸術」の一般研究と、作家研究中心の「個別研究」に細分される。他方、⑤「和書」としては、東アジアと西ヨーロッパの思想・文化関係の原典・翻訳書・研究書など約 860 点が収められている。これとは別に、中川先生御自身の「久定業績」と民間の農化学者であった御父君「久順旧蔵書」総計約 120 点は、和洋書の区分をつけずそれぞれ独立の項目を立てた。なお、「中川文庫」については京大の蔵書データベースへの入力作業が進行中で、現時点で利用可能なのは 3000 点程度にすぎないが、遅くとも 2018 年度中には文庫全体の公開を完了したいと考えている。

また、11 月のワークショップにあわせて、『京都大学人文科学研究所所蔵 中川文庫貴重書目録』も編集した。「中川文庫」のうち、「貴重書」登録を受けた 1199 点の書誌情報を集めた小冊子である。この小冊子でとりわけ目を惹くのは、若き日のディドロが手がけたテンプル・スタンヤン『ギリシア史』仏訳(1743 年)から、ディドロの哲学的遺言と言ふべき『クラウディウスとネロンの治世についての試論』(1782 年)まで、生前、自身の書き物を世に問うことの稀だったこの哲学者の公刊本のほか、『百科全書』を巡る論争の渦中に置かれたプラド神父の博士論文とパリ大学によるその検閲、あるいは 18 世紀から 19 世紀にかけて公刊された「ディドロ全集」の諸版である。ほかにもグリム、レナル、ドルバック、ネジョンといったディドロの友人たちや、ベール、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、エルヴェシウスといった同時代の哲学者たち、フリードリッヒ 2 世、エカチェリーナ 2 世、ネッケルといった君主や政治家の著作も見逃せない。また、哲学者間の論戦や「啓蒙」と「反啓蒙」の競合に注目して 18 世紀フランスの言説空間を描き出そうとした中川先生の関心を反映し、多くのキリスト教擁護論や「反哲学」的論駁書や、当時のジャーナリズムの勃興を支えた数多の文芸・政治関連の定期刊行物も収められている（この『目録』はまだ残部があるので、希望者には無料でお送りします。ご連絡下さい）。

この「中川文庫」の公開とともに、京大人文研には、21 世紀の日本に居ながらにして 18 世紀フランスの思想や文化の一端に直接触れつつ研究を進めることのできる環境が整ったことになる。中川先生と洋子夫人には、あらためて心から御礼を申し上げたい。今後この貴重な文庫を後進の者たちがそれぞれのやり方で活用していくことが、中川先生に対する最高の返礼になるはずである。全国共同利用・共同研究拠点としての京大人文研の利用法の一つとして、当学会員にもぜひ積極的な活用をお願いしたい。

ミニ・シンポジウム「デジタル資料の展開と古典研究の可能性に向けて」その後

福田名津子（一橋大学附属図書館）

2015年6月の日本18世紀学会第37回全国大会初日、深貝保則会員をコーディネータとするミニ・シンポジウム「デジタル資料の展開と古典研究の可能性に向けて：思想／文芸／歴史研究と手法としての情報」は多くの聴衆を集めた。「共通論題」を除き、同一テーマで複数人が発表するという形式も珍しく、2000年代に入ってより存在感を増した「デジタル」の問題を扱うという趣旨が参加者を引き付けたのではないかと思う。18世紀研究に携わる研究者たちはデジタルとどう付き合っているのか、どう付き合っていくべきなのか、隣人に話を聞いてみたいという素朴で強い関心があった。筆者もシンポジウムの報告者であると同時に「隣人の様子を知りたい」ひとりであった。

同シンポジウムの6か月後、深貝会員と筆者をコーディネータとし、類似テーマのワークショップが開催された。海外から研究者を招聘し、また前回に引き続き玉田敦子会員にも報告していただいた。2016年2月10日は国立情報学研究所にて *The promotion of digital humanities and the new possibility of “analogue” humanities*、2月12日は一橋大学に *Rare materials, digitization, and the role of curators*、2月15日は長崎大学にて *Japan-Netherlands relation, old photographs, and interactive technology* と全3回にわたる連続企画である。その報告書として「「デジタル・ヒューマニティーズ2.0」がもたらす人文・社会科学への影響：平成27年度デジタル・ヒューマニティーズ関連ワークショップ」（<http://doi.org/10.15057/28002>）を執筆したのでご紹介したい。

18世紀学会のミニ・シンポジウム、連続ワークショップとも「デジタル・ヒューマニティーズ」との関わりが深い。デジタル・ヒューマニティーズとは「コンピューティングと人文諸学の交差する場で行われる研究と教育」を指し、定義の広さと事例の多さがその理解を難しくしているが、結局は多様な事例に触れることが近道なのではないかと思う。OCRを用い、あるいは人海戦術でテキストを翻刻するプロジェクトはすでにいくつか知っていたが、今回の連続ワークショップで興味深かったのは「イメージ」を翻刻する試みであった。オランダのアムステルダム国立美術館やボイマンス・ヴァン・ペーニンゲン美術館では、収蔵作品画像のメタデータをモチーフのレベルにまで拡充している。1枚の絵画中に描かれたモチーフをすべてメタデータとして登録し、検索などの演算に対応できる仕組みを構築しているのである。これを知ったとき頭に浮かんだのは、テキストに限らず人間の営為をすべてデータ化し、何らかし計算に役立てようとする壮大なプロジェクトの存在である。ビッグデータ分析のことも連想した。ECCOを使っているときの私の小さな感動は、人類の壮大なデータ化プロジェクトとつながっているようにも思えた。

デジタルが人文・社会科学研究にもたらす功罪について、利点はいくら強調してもしすぎることはない。ある中世英文学研究者から、かつては大量のマイクロフィルムを抱え、リーダーの置かれた階まで1日に何往復もしてひたすら読み漁る日々を過ごしたというエピソードを聞いたが、EEBOやECCOが当然になりつつある世代には分からない苦勞であろう。もっといえば、渡航しなければ必要な貴重資料にアクセスできなかった時代もあった。デジタルには注意すべき点もあるが、アクセシビリティの改善は揺るぎない。

デジタルで注意すべき点は、第1に、デジタル複製物はどれほど精巧であっても捨象された存在であり、オリジナルとその表象物を混同してはならない。触覚や嗅覚に関する性質は「現物」と不分離であるため、デジタル複製物では失われている。複製時のエラーやその修正も問題をはらんでいる。第2に、デジタル・ヒューマニティーズの諸段階、すなわち(1)モノをデータに変換する段階、(2)メタデータを付与する段階、(3)メタデータを計算する段階、(4)計算結果を分析する段階のうち、第2および第4段階はコンピュータに全面的には任せられず、読者ないし研究者の積極的な関与を必要とする。分析はもちろん、公平を期すメタデータの付与でさえ、その選定・内容など研究者の恣意性に影響を受ける。

連続ワークショップのなかで Inger Leemans は、デジタル・ヒューマニティーズは「方法であって学問分野ではない」と説明した。デジタル・ヒューマニティーズを方法と見なすとして、通常のそれと異なるのは、「知の媒体変化」を伴っているためにインパクトのきわめて大きい点である。雄弁から粘土板とパピルスへ、卷子体から冊子体へと知の媒体が移行した際、知の内容と理解も影響を受けた。これらと同種の変化を私たちは経験しているのだと思うと少し怖い気さえするが、デジタルを「なかったこと」にはできない現状で、私たちは前を向いて試行錯誤を繰り返すのだと思う。

*詳しくは以下をご覧ください。

福田名津子「「デジタル・ヒューマニティーズ 2.0」がもたらす人文・社会科学への影響：平成 27 年度デジタル・ヒューマニティーズ関連ワークショップ」『一橋大学附属図書館研究開発室年報』第 4 号、52-65 頁、2016 年 6 月。 <http://doi.org/10.15057/28002>



事務局より

日本 18 世紀学会役員選挙について

当学会では、2 年ごとに役員選挙が行われており、2017 年はその年に当たります。同封の投票用紙、封筒を使って投票してください。要領は別紙をご参照ください。**投票締め切りは 2017 年 3 月 3 日（土）です。**なお、役員選挙用の封筒にほかの書類（業績リスト等）を入れないでください。

日本 18 世紀学会会員名簿について

2017年は名簿作成の年度に当たります。同封のカードに間違いや変更がないかどうか、ご確認の上、**3月3日（土）までに事務局に連絡**をお願いします。なお間違いや変更がない場合も、その旨を事務局にご連絡ください。また、生年月日は役員選挙の被選挙権者名簿作成のために必要ですので、ご記入ください。（名簿では公表されません。）

事務局の連絡先は以下の通りです。

・ E-mail : jsecs.nagoya.uni@gmail.com

・ 郵便 : 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院経済学研究科

日本18世紀学会事務局

・ tel: 052-789-2380, fax: 052-789-4924.

業績アンケートについて

『年報』に会員の業績を掲載するために、例年この時期にアンケートを行っています。同封の用紙の要領に従って、回答をお願いします。**締め切りは3月3日**です。データの整理のため、早めにお返事いただければ幸いです。（3月刊行分は予定でもかまいません。また、次年度号に掲載していただくこともできます。）

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため、身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき、会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。事務局移転に伴い、郵便振替口座も変更となりました。今後は以下の振込口座へ会費の納入をお願いいたします。

<郵便口座振替で振り込む場合>

口座記号番号 : 00800-7-183350 口座名称 : 日本18世紀学会事務局

<銀行等から振り込みする場合>

銀行名 : ゆうちょ銀行 店名 : ○八九店 (ゼロハチキュウテン)

預金種目 : 当座預金 口座番号 : 0183350

『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、数年前から、大会での発表をもとにしたもの以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局までお申込み下さい。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限ります。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないと思われる方は、積極的にご推薦ください。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は10月半ばまでに、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

寄付のお願い

寄付を希望される方は、別紙要領をご覧ください。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され会費については次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、これまでメーリングリストより配信されていたにも関わらず最近メールが届かないという方、またご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：出羽尚、王寺賢太(国際幹事)、大石和欣(常任幹事)、隠岐さや香、小田部胤久(国際学会執行委員)、川島慶子、小関武史(常任幹事、年報担当)、斉藤渉、坂本貴志(常任幹事、年報担当)、武田将明、玉田敦子(常任幹事)、寺田元一(東アジア交流担当)、長尾伸一(代表幹事)、馬場朗、逸見龍生(常任幹事、年報担当)

会計監査：安室可奈子、真部清孝

日本18世紀学会ニュース 第83号 2017年1月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 長尾伸一

事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院経済学研究科 日本 18 世紀学会事務局

e-mail: jsecs.nagoya.uni@gmail.com

tel: 052-789-2380

fax: 052-789-4924

<http://www.gakkai.ac/jsecs/>